帝國圖書館增築記念展覽會目錄

昭和五年三月十五日

K3
E85
89W61726

帝國圖書館增築記念展覽會目錄

近世名家筆蹟（第一室）

近世の國學者の系統に屬するもののみを陳列し儒學者は國史研究の上に關係ある水戸學の主なるもののみに止めたり。

中院通勝　京、慶長十五年歿　二冊
自筆本　伊勢物語

烏丸光廣　京、寛永十五年歿　一冊
自筆本　小倉山莊色紙和歌　尾崎雅嘉自筆序あり

荷田春滿　京、元文元年歿　一冊
自筆本　紫禁和歌草

自筆本　百人一首古說　加茂眞淵自筆頭書　一冊

K3
E85

帝國圖書館藏書
1.11.-6

89W61726

小澤蘆庵　京、享和元年歿
自筆本　古今六義諸說　一冊
書入本　古今和歌集　一冊

伴蒿蹊　京、文化三年歿
自筆本　蒿蹊百首詠草　二冊
短冊

富士谷御杖　京、文政六年歿
自筆本　古事記燈　四冊

橋本經亮　京、文化三年歿
自筆本　木積冊子　一枚

似雲　京、寶曆三年歿
書入本　草菴和歌集類題　一冊

藤貞幹　京、寛政元年歿
自筆本　集古圖　同目錄　一冊

山田以文　京、天保六年歿
書入本　江家次第　一冊

西村兼文　京、
自筆本　京都墓所一覽　九冊
自筆本　古經跋語　一冊
自筆本　隨見錄　三冊

香川黃中　京、文政四年歿
短冊　五冊

一枚　三

香川景樹　京、天保十四年歿
短冊　一枚

木下幸文　京、文政四年歿
自筆本　すの濃紙　一冊

八田知紀　薩、明治六年歿
自筆本　花百首題詠　一冊

速水房常　京、明和六年歿
自筆本　禁裏女中方御祝次第　一冊

契沖　大、元禄十四年歿
書簡　一軸

下河邊長流　大、貞享三年歿

自筆本　御陽成院御制　慶長六年叙位記　一冊

尾崎雅嘉　大、文政十年歿
自筆本　令義解論義　一冊

上田秋成　大、文化六年歿
自筆本　茶説　和田三樹、香川景樹自筆奥書　一軸
書入本　出雲國風土記　一冊

萩原廣道　大、文久三年歿
自筆本　山陽道名所　二〇冊

吉川惟足　江、元禄七年歿
自筆本　野守鏡　一冊

加茂眞淵　江、明和六年歿
書簡　一通
入門誓詞　宇計比言　眞淵門人等自書　二軸

林諸鳥　江、寛政六年歿
書入本　古今六帖歌抄　一冊

山岡俊明　京、安永九年歿
自筆本　筑紫記　一冊

揖取魚彦　江、天明二年歿
自筆本　喪志編　一冊

自筆本　二十五番歌合　一冊

内山眞龍　遠、文政四年歿
自筆本　新撰姓氏錄註　八冊

石川依平　遠、安政六年歿
書簡　一軸

加藤枝直　江、天明五年歿
自筆本　古今集抄　四冊

自筆本　古今餘材抄　五冊

自筆本　伊勢物語鈔　一冊

加藤千蔭　江、文化五年歿
自筆本　百人一首　自畫自讃　一冊

自筆本　萬葉集略解　一冊

書簡　二軸

村田了阿　江、天保十四年歿
自筆本　鳥獸蟲魚類字　三冊

自筆本 名義 一冊

吉田敏成 江、慶應中歿
自筆本 千穉樓隨筆 八冊

村田春海 江、文化八年歿
自筆本 古言梯の誤またもれたる假字 一冊
書簡 一軸

清水濱臣 江、文政七年歿
自筆本 遠唎々々草 二冊

山田常典 江、
自筆本 さほかは 一冊

春田永年 江、寛政十二年歿
自筆本 茶經中卷 茶器圖解 二冊

岸本由豆流 江、弘化三年歿
自筆本 萬葉集考證 五冊

加藤千浪 江、明治十年歿
自筆本 荻園詠草 四冊

小山田與清 江、弘化四年歿
短冊 一枚

鶴峯戊申 江、安政六年歿
自筆本 史傳摘鈔 一〇冊

伊能穎則 總、明治十年歿
自筆本 學廼道 一冊

間宮永好 江、明治五年歿

自筆本　箱根七湯志　一〇

山崎美成　江、文久三年歿

自筆本　南畝文庫藏書目　二冊

自筆本　正誤世事談綺　二冊

橘守部　江、嘉永二年歿

自筆本　虚字詠格　一冊

本居宣長　勢、享和元年歿

自筆本　古今集遠鏡　六冊

自筆本　鈴屋大人紐鏡藁本　一軸

書簡　一通

上田百樹　江、

自筆本　倭姫命世記　一冊

伴信友　若、弘化三年歿

自筆本　職人歌合畫本　五冊

自筆本　三山論學記　一冊

自筆本　伴翁雜記　一冊

村田春門　江、天保七年歿

自筆本　百人一首略抄　一冊

田中大秀　飛、弘化四年歿

自筆本　土佐日記解　二冊

鈴木朗　尾、天保八年歿

書入本　萬葉和歌集　二〇冊

稲葉通邦尾、
自筆本　雫抄　鞍馬之部　二冊
自筆本　犬追物興業之覺　一冊

齋藤彦麿　江、安政六年歿
自筆本　稚新宮　一冊

本居大平　勢、天保四年歿
短冊　一枚

西田直養　肥、文久三年歿
自筆本　筱舍集　一冊

足代弘訓　勢、安政三年歿
自筆本　あまのさへつり　二冊

自筆本　足代翁手簡　一軸

柴田常昭
自筆本　詞つかひ　宣長書簡附　一〇冊

平田篤胤　江、天保十四年歿
書簡（跋は息鐵胤也）　一軸
短冊　一枚

穂井田忠友　京、弘化四年歿
自筆本　高ねおろし　一冊

北村季文　江、嘉永三年歿
自筆本　阪城受降圖奥書　一軸

伊勢貞丈　江、天明四年歿
書入本　日本紀竟宴歌　一冊

松岡行義　江、嘉永元年歿
自筆本　刀劔雜考　一冊

萩原宗固　江、天明四年歿
自筆本　松島紀行　一冊

屋代弘賢　江、天保十二年歿
自筆本　輪池叢書　二冊
自筆本　輪池翁歌集　一冊
自筆本　古今要覽稿々本　一冊

狩谷掖齋　江、天保六年歿
自筆本　和名抄分音　四冊
自筆本　渉貨漫抄　一冊
自筆本　和名抄釋義　四冊

黑川春村　江、慶應二年歿
自筆本　諸家目錄常樂抄　三冊
自筆本　新國史考　一冊

岡本保孝　江、明治十一年歿
自筆本　待るゝこゝろ　一冊
自筆本　況齋隨筆　一冊

伴直方　江、
自筆本　諸國風土記　一冊

伊庭秀形　江、明治五年歿
書入本　詞花和歌集　一冊

石橋眞國　江、安政二年歿
書入本　新選字鏡　一冊
書入本　磨光韻鏡　一冊

喜多村節信　江、安政三年歿
自筆本　筠庭雜錄　一冊
自筆本　畫證錄　一冊
自筆本　愚得襍載　一冊

齋藤月岑　江、明治十一年歿
自筆本　腫餘操觚　二冊
自筆本　翟巢漫筆　一五冊

谷川士清　勢、安永五年歿
自筆本　安東郡沙汰文　一冊

荒木田麗女　勢、文化三年歿
自筆本　喜多山　一冊

鹿持雅澄　土、安政五年歿
自筆本　萬葉集品物圖繪　三冊

中島廣足　肥、文久四年歿
自筆本　宇都勢この飛　二冊

堀田方舊　尾、寛政年中歿
自筆本　護花關隨筆　一三冊

徳川光圀卿　元祿十三年歿
書簡　一通

徳川齊昭卿　萬延元年歿
書簡　五軸

藤田一正　文政九年歿
自筆本　朱文恭先生祠堂植山櫻記　代杉山子方　一冊
書入本　大戴禮記　二冊
書簡　一通

藤田彪　安政二年歿
自筆本　呈智恩法王詩　代源烈公　一冊
書簡　一軸

會澤安　文久三年歿
自筆本　東照宮祭日有感　一冊
書簡　一通

立原任　天保十一年歿
自筆本　見聞書目　二冊
自筆本　琴學考　一冊

青山延于　天保十四年歿
自筆本　拙齋集　二冊
自筆本　經義考抄　二冊

青山延光　明治三年歿
自筆本　國史紀事本末　一四冊
自筆本　佩弦齋文集　一四冊

自筆本　建議書　一冊

川口長孺　天保五年歿
自筆本　綠野園文集　三冊
自筆本　綠野園雜錄　一冊
自筆本　時務論　一冊

杉山忠亮　弘化二年歿
自筆本　送莊司子裕游京師序　外二篇　一冊

吉成信貞　嘉永元年歿
自筆本　登愛宕山記　一冊

茅根泰　安政六年歿
自筆本　觀大阪戰圖　外三篇　一冊

小宮山昌秀
自筆本　修水府名族傳料　六冊
自筆本　垂統大記稿本類　一冊
自筆本　垂統大典御用留　一冊
自筆本　垂統紀事　一冊
自筆本　楓軒年錄　三八冊

豐田亮　元治元年歿
書簡　一通

水藩名士肖像

中山道宿驛（第二室）

木曾海道六十九次眞景　傳北齋自筆　六八枚

木曾海道六十九次　廣重、英泉畫　保永堂版　六八枚

木曾六十九驛　豐國畫　林庄版　六八枚

木曾六十九驛　小田切春江自筆　六八枚

板橋　蕨へ二里八丁　府下北豐島郡板橋町

驛の名は、治承頃より世上に聞えて、安養院、東光寺の古碑にも、當年の察ひ知らるゝを、江戸時代となりては、中仙道の首驛とて、南音は北語と雜然たるに、行李は杖笠と東西したりしを、物移り時改りては、緣切坂の、榎の、枝枯れ幹は朽ちて、樹下の第六天の小祠のみ蕭條たるに、土地の名の起れるといふ板橋は、いたくせまけれども、橋下の石神井の水は、綿々として、今猶、離痕客情をば、さゝやくにも似たらんか。

蕨　浦和へ一里半　埼玉縣北足立郡蕨町

戸田の津の、今は橋梁の便あるものから、古渡頭の邊には、舟自ら横はりて、人はいづらぞや。見渡せば、水上遠く、秩父の嶺には、曉色開けて、染め出したる山光の、落ちて流れて、入間ともなり、戸田ともなり、やがては、隅田川の名に流れぬるとぞ。此處を、御所跡と唱ふるは、南北朝ごろに、澁川左衞門佐義行の、居館の地なりしよりといふが、今は、朝日の、稻畦を照らして、桑蔭に、炊烟ゆたかなるの、村里とはなりぬるかし。

浦和　大宮へ一里十丁　埼玉縣北足立郡浦和町

調神（つき）社は、式にも見えて、朱の玉垣物ふりたるを、姓氏錄に、百濟の歸化人に、調の姓を賜ふ事ありて、此里には、其種族の住みたりともいへば、ちなみあるの御社にもあらんか。浦和坂といふは、燒米をひさぎしより、燒米坂の名に高きが、此處までは、行路も坦々として、一奇なきを、坂は急ならねども、登りつくせば、眼界頓にひらけつゝ、細徑と長堤には、寸人と豆馬を織り出して、平川と林外には、禾青と稻黃を、染めなしたるが、村南村北は、一幅の畫を、展ぶるにも似たらんか。

大宮　上尾へ二里八丁　埼玉縣北足立郡大宮町

今は、鐵路の、縱橫して、車のわだちのかしましきが、昔は、潮田出雲守資忠が居城とて、永祿天正の當時には、當國にての雄鎭なりしとぞ。天正十八年には、此處を人馬の繼立と定められしより、山道の名驛に數へられたれば、さてぞ大宮曆も、三島と相並びて、氷川の神威は、今もいやちこなるより、老杉は寶殿を圍

んで、紫烟ゆるく、神門は千木高知りて、瑞雲のどかに、行人は鞠躬として、征馬の肅乎たるも、眞に、人外の境とこそいふべけれ。

上尾　桶川へ三十丁

埼玉縣北足立郡上尾町

關東古戰錄に、此地名は見えたれども、驛唯一の古寺なりといふ、遍照院の記錄も失はれては、淺間の舊祠のみぞ、路の傍に、荒にあれたるを、叢立る松の老樹の、さても物云はゞ、昔をとひてましを。

桶川　鴻巢へ一里三十町

埼玉縣北足立郡桶川町

古昔には、桶川鄕と稱へて、鎌倉の勇士足立右馬介遠元が、所領の地なりしとぞ。近き世には、桶川臙脂の名にて、知られたるを、紅花に風斜めにして、繡裙輕きの夕は、一村一樣の紅妝に、さこそ風情や、おほかるらん。

鴻巢　熊谷へ四里八丁

埼玉縣北足立郡鴻巢町

驛の鎭守なる、氷川の宮の神木に、鵠の巢くひしが、土地の名の起りなりと、羅山の文集には、見えたれども、いかゞなるべきや、此地の勝願寺は、淨土十八檀林の一とて、弘安中に、良忠上人が開基以來は、法燈東國にかゞやきて、中興の不殘上人は、東照公の崇信も、いと深かりしといひしを、今は僧去り、寺荒れて、門外の孤松の、空しく烟にむせびたるぞ、淋しげなる。

熊谷　深谷へ二里三十町

埼玉縣大里郡熊谷町

綱が住みたりといふ、箕田村の八幡の社前を過ぐれば、一道の眺望は、目もはるばるにて、豆莢と栗穗の、右を色どりて、忍の城には殘照紅なるに、白砂と洲渚は、左を畫がきて、荒川の流れは遙空と碧なるが、かくて、熊谷といふは、直實の父直貞が、大熊を仕留しよりの名にて、其が蓮生の遺跡とては、今も熊谷寺とて、無双の靈場なるにぞ、不斷の香煙は、寶臺を繞りつゝ、慈雨は朝暮に、祇樹にそゝぐといふも、かたじけなさのきはみなるべし。

深谷　本庄へ二里二十九丁

埼玉縣大里郡深谷町

康正年中に、上杉憲房の、此處に城を構へしが最初にて、江戸の初めには、上總介忠輝の守護たりしを、信州に移りてよりは、驛の北の、田谷といふ邊りに、昔の堀のあとの、衰草におほはれては、悲風の住み家となり、頽れたる土居には、雨暗くして、愁雲のたゞよふのみなりしを、夫もやがては、絃索の聲と變りゆきて、今は、旅況と閨情との、起きゆく別れ路の、あしたの袖や、つゆけかるらんと思ふも、はかなきは、移りゆく世のならひなりけり。

本庄　新町へ二里

埼玉縣兒玉郡本庄町

岡部村は、岡部の原の名殘にて、源平の頃に名高かりし、六彌太忠澄が、住みし所とて

なきをとふ岡部の原の古塚に秋のしるしのまつ風そふく

と、回國雜記に、詠まれたりつる、五輪の塔は、普濟寺の後にありて、岡部一門の墓なりといふも、樹疎

に、草枯れて、只秋風の、吹くにのみぞ任せたる。忠澄夫妻の像を、寺門に安置したるは、忠澄、日頃は、榮朝禪師を慕ひて、當寺を建立せるの、ちなみなりとかや。本庄は、古く若泉の庄ともいひて、鎌倉頃には兒玉黨の住みたる所なりとぞ。

新町　倉賀野へ一里半　群馬縣多野郡新町

上武の境の、神名川は、天正の頃に、瀧川一益が、北條との合戰ありし跡なれども、今はたゞ、一双の閑鷗に、秋水しづかなるを。東の村はづれに、烏川と神名川の相合ふにぞ、落合の稱も起りぬらんか。烏川の右に、江烟の間より、色濃く見ゆる雲は、赤城榛名の山々なりとぞ。

倉賀野　高崎へ一里十九丁　群馬縣群馬郡倉賀野町

烏川の北に、岩鼻といふは、代官所のありし地にて、倉賀野一黨の城砦も、川を背にして、天正頃までは榮えたりしを、其全盛も、流に隨つて去りしよりは、殘柳の依々たるのみぞ淋しげなる。此處より西に、下佐野といふは、舟橋のあとなるが

跡もなく昔をつなく舟橋はたゝ言の葉の佐野の夕くれ

北國紀行にすら、斯う云ひたりしを、今は名をのみきゝわたるばかりなり。

高崎　板鼻へ一里三十丁　群馬縣高崎市

今の兵營は、高崎城の名殘にて、古名の和田は、義盛のちなみによれるとか。慶長の三年に、井伊直政の居城たりし時に、改修の事ありし後は、今の名に改めぬるが、廢藩までは、大河内松平氏の、八萬石の治所として、當國一の、要害とは稱へられたりとぞ。市中の大信寺は、駿河大納言の墳墓の地とて、世には高名なれど、忠長が傳說とては、其事やがて藐たるものから、陰風そゞろに古塚を吹いて、只一鳥の哀々をきくのみなり。

板鼻　安中へ三十町　群馬縣碓氷郡板鼻町

豐岡村の、臺が松は、「ひく人なしに年やへぬらん」と、回國雜記に見えたるを、枯れては薪の烟の、其跡としもなきを。板鼻に、伊勢三郎が住へる由は、義經記にも見えて、其後の數度の合戰ありし由は、鎌倉九代記に記されたるが、事は古りたるを、碓氷の流のみは、何を怨みて怒れる水の、これをわたり、かれをこえては、旅情いよ〳〵に深しとこそ。

安中　松井田へ一里三十丁　群馬縣碓氷郡安中町

相模次郎時行は、安中といふ所に、川を前にあてゝ陣取りたりと、太平記に見えたるの所にて、城址は北の方にて、維新前は、板倉侯三萬石の、治所なりしとぞ。驛を出れば、榛名妙義の山々は、左手に擾々として、批把が窪、逢坂などを、過ぎなんほどぞ、山路の露は漸うにしげくして、一歩は一歩よりも、荒涼の境に入りぬるとぞ。

松井田　坂本へ二里半　群馬縣碓氷郡松井田町

小野篁の、學校の跡とは、疑はしけれど、賴朝卿、其夜は松井田に宿ると、曾我物語に見えたるは、事實ならんか。城址は西に離れて、新堀といふ邊なるが、麥の穗波に月の影のみして、其處としも思はれぬを、臼井などいふ邊は、谷深く山重りて、百合若大臣射貫の岩、さては足跟石などの、奇勝妙境相ついで、日本武尊の、御傳說多きの所なり。

坂本　輕井澤へ二里八丁　群馬縣碓氷郡坂本町

橫川は、關のあとにて、足柄、碓氷と、上古よりの固めなりしを、江戸時代には、女切手、鐵砲の改めのいときびしくて、此處と峠町とは、安中藩の守護なりしとぞ。されば坂本の驛は、山間ながらも、難所をひかへての、人馬の繼立に、當時は繁昌をきはめしを、驛の眞中におつる谷川の、水さへ枯れては、人目も草も、零落のきはみなるらん。

輕井澤　沓掛へ一里五丁　長野縣北佐久郡東長倉村經井澤

碓氷峠は、山道中の難所にて、其頂上には、三つの峯の相並びて、一峯ごとに、何れも一態あるを、雲深く風凄き、最後の一峯にぞ、熊野權現はたゝぜ給ふを

うすひ峠のごんげんさんはわしのためには守神

とこそ、上り下りの追分唄にも、偏に平安を祈りつゝ。かくて之よりは、みすゞかるの信濃路なるが、輕井澤の舊驛は、寒烟のたえ〳〵なるを、南の新驛のみは、夏なき里と年々に、人の集ひては、綠蔭に笑語もいとゞ濃かなりとぞ。其遠近の里と云ふは、伊勢物語の、「信濃なる」の歌より、思ひよせたるにもあらんか。

沓掛　追分へ一里三丁　長野縣北佐久郡西長倉村の北

今の東長倉村の大字に、其名のみは殘りたれども、昔だに物寂びたる里なりしを、家遠く、人氣もうとき此頃はしも、宿とりかねし旅人の、枯野に迷ふ愁懷は、淺間の烟の、行衞知らぬにも、似たらんかし。

追分　小田井へ一里十丁　長野縣北佐久郡西長倉村追分

此里はづれよりぞ、右は北國路へ、左は木曾路の、追分の驛とは、聞えたるを、客中客に別るゝの、深き怨を呼び起して、たえてはつゞく、一曲の唱歌は、誰家の子ぞや。此處を過ぐるの馬上の征人は、頭に霜の、さこそは置きそはるらんと哀なり。以上を淺間の三宿と稱へて、長倉の牧の名殘なりとぞ。

小田井　岩村田へ一里七丁　長野縣北佐久郡御代田村

追分そりといふ、坂道をこゆれば、廣々としたる平原の、蟲聲は露華を綴りて、楓葉に遠山を色どりたるなんど、秋は殊更に、興多き所の、原つきて、大久保橋をわたれば、小田井の驛の、今は御代田と呼びかへて、鐵路の開通よりは、追分の繁盛も、此地に移りぬるといふ。

岩村田　鹽名田へ一里半　長野縣北佐久郡岩村田町

江戸時代には、内藤侯一萬五千石の、陣屋の跡にて、此處よりは、善光寺に、小諸に、甲州等への、道路は縱横に通ふものから、客愁と思ひみだれて、離々の情も、一層ならんか。

鹽名田　八幡へ二十七丁

長野縣北佐久郡中津村鹽名田

根々井の里は、木曾が郎黨の、大彌太にて知られたれど、平塚村の相生の松は、只名をのみぞ傳へぬるとぞ。鹽名田は今の中津村にて、千曲の河岸なるが、其千曲河とは

新古今

君かよはちくまの川のさゝれ石こけむす岩となりつくすまで

とありて、水源は、佐久郡金峯山の谷間よりいでゝ、沼々たる流の、天をもひたすらんを、遠行の客ならずとも、長き怨みは、江水と、つくるの期なしともいふべくや。

八幡　望月へ三十二丁

長野縣北佐久郡南御牧村八幡

郡内にての大社なる、八幡の社あるよりの名にて、角間川の流れは、立科山より出でゝ、驛の末にて、千曲川へ入るといふが、二水は、今も爭ひ流れつゝ、やがて曉霧の、立こむるの邊は、世にきこえたる川中島なりとぞ。

望月　蘆田へ一里八丁

長野縣北佐久郡本牧村望月

古今集

逢さかの關の清水にかけ見えていまやひくらん望月のこま

の、古歌に名高き、古牧場にて、村後の岡は、其あととかや。吹上坂の右なるは、望月城の址にして、望月氏は、滋野、海野と、騎射三家と唱へられて、鎌倉以來の名家なるを、天文の信雅の時に、武田家に附屬したりしを、其信雅が開基なる、望月山城光院は、今も野水の、村路を斷てるの所に、朱樓青嵐の、いと寂しげにぞ殘りたる。

蘆田　長久保へ一里半

長野縣北佐久郡蘆田村

更級、姨捨も近しと聞えて、物さびたる里なれど、足利の末頃には、蘆田氏とて、勇名高き武士の、住みたる所なりしとぞ。此處に鎭座の、立科の神とは、三代實錄にも、其由緒をのせて、世に高名なる御社なり。

長久保　上和田へ二里

長野縣小縣郡長久保新町

笹取峠の險は、石割坂、石荒坂の、名にも聞えて、雲をふみ、霧にむせびて、やがて長窪といふは、いとも寥落の境なり。依田川の、流れの源は、大内峠とて、此處よりは南一里ほどなるが、天文の十一年十月といふに、武田と、小笠原、村上兩家との、古戰場にして、合戰の次第は、大内軍記にもれなきを、山上の松の嵐には、當年のひゞきや猶ものこりぬらんかし。

上和田　下諏訪へ五里八丁

長野縣小縣郡和田村

和田の驛は、溪流の前後に往返して、一水を渡れば、やがて一水あり。層崖は、右左に連接して、一重盡る

と見えては、更に一重なるに、嶺の道は、羊腸として、幾回轉しつゝ、上下は六里にもあまれるが、夢にも人にあはぬ所とて、頂上には、餅屋の茶屋とて只一軒あるが、一人扶持の補助ありしといへるにも、當時の不便の思はるべきを、斯る奥深き所なれば、奇草珍花の名もしらぬが多しとは、山中採藥の翁ぞ敎へたるは。

下諏訪　鹽尻へ三里　長野縣諏訪郡下諏訪町

諏訪の國の昔より、史跡は、いとも多かるを、わけても春と秋との宮の、下の明神の神威は、言の葉にかけんもかしこきを。此處より見れば、右に奔れる、慈雲の山々と、左にひきたる、和田山のすその、搔いつゝみたる、たゞ中に、鏡の樣なるは、諏訪の湖にて、其山と山とのすきまより、一朶の芙蓉の、うき出たるは

信濃なる衣かさきに來てみれは富士の上こくあまのつりふね

この古歌にこそ、所のさまを知らるべうや。

鹽尻　洗馬へ一里三十丁　長野縣東筑摩郡鹽尻村

鹽尻嶺より、諏訪の湖面を見はるかせば、柳岸花汀の打霞みたるに、高島城の、烟雨の間に隱見するなんど、春の山ぶみは、詩情いともゆたかなるが、山を降れば、桔梗が原は、ほど近うして、此處こそ、天文年中に、小笠原衆と、武田方との古戰場なりしとて、古歌にも

もののふの草むすかはれ年ふりて秋風さむしきちかふか原

洗馬　本山へ三十丁　長野縣東筑摩郡洗馬村

禾黍の穗波も、秋風に搖々として、山間には開けたるの所なり。驛の西にある、太田の清水といふは、木曾殿の馬を洗ひし所なるを、何時よりかは、西行の清水の歌に、思ひ併せられたるが、それも夏行く人の、命ぞとのすさみならんかし。

本山　贄川へ二里　長野縣東筑摩郡宗賀村本山

此地の觀音堂は、信州札所の一にして、驛を出れば櫻澤の橋といふは、松本領と、尾州領との、境界なりとぞ。此處よりは木曾山の入口とて、懸崖に根なく、深溪は底なき間を、つたかづらに、漸う寅緣して、歩みかねたる棧道の、憂さも日數もつもりゆくらん。

贄川　奈良井へ一里半　長野縣西筑摩郡楢川村贄川

尾州領の頃は、此處に番所を置きて、木曾名物の、曲物の吟味ありし由にて、諏訪社、觀音寺等の、由緒ある社寺には、當年の繁昌をも、察ふべけれど、路次は、次第に亂峽の間に入るものから、樹老いて、日月黑きの境なるを、住むにはなれて、彼處の谷間、此處の岩かげに、熊膽、野獸の皮なんどを、ひさげる人の、後世のいとなみは、とてもかくても、思へばしがなきは、山里のなりはひなりけり。

奈良井　藪原へ一里半　長野縣西筑摩郡楢川村奈良井

此處は、木曾の谷の、北口にて、お六櫛召せ々々の山樵の聲には、遠人いとゞ、離情をや想ひ起すらんを。

さいの神坂の邊よりは、一歩に一驚の險なるものから、後なるは前者の足趾をいただきつゝも、半里餘を登れば、天門開けて、雲光白きが、鳥居嶺の絶頂なりとぞ。山の右の腰に、木曾殿の硯の水とて、清水の湧きいでたるがあるは、何の昔語りをや、書きも流しぬらんか。

藪原　宮越へ二里

長野縣西筑摩郡木祖村藪原

續紀に、大寶二年十二月に、岐蘇の山道を開くとあるは、此處より下馬籠までの、十七里をば云ひたるにて、かくてぞ、山肩に路あり、斷崖も橋ありて、驛路は僅かに通ふ事とはなりぬるとぞ。木曾の鷹匠屋敷といふは、此地にありしにて、山中の鷹の支配といふも、今には耳新らしき制度ならんか。吉田村の川向ひなる八幡の御社は、木曾義仲を祭れる由にて、社の下は、其屋敷あとなりとぞ。巴が住めるは、德恩寺村にて、木曾の本流は、こゝらより道の左右に傍ひて流るゝを、旅のやつれの、影をば宿すも哀れなりけり。

宮越　福島へ一里半

長野縣西筑摩郡日義村宮越

仲三權守兼遠の屋敷は、此村の一里下にて、次郎兼光がのは、驛をはなれて、往還の左に見ゆるが、其樋口澤の谷河は、石白う、水蒼みて、仰げば、駒ケ岳は、突兀と、天空に聳えたるが、昔は、山上に神馬ありて、やがて石に化したるより、山の名には負ひたりといふを、昔語りも古りにたるが、石馬斷かれども、山月のみぞ、すみわたりぬるは。

福島　上松へ二里半

長野縣西筑摩郡福島町

木曾谷の治所と、關の構へもありて、舊くは豐饒の地なりしとぞ。關守は山村甚兵衛とて、木曾義昌の家人の末なるが、尾藩のあづかりなりしとかや。此地の興善寺といふは、嘉吉中の創建にて、大華和尚の開基なるが、寺のうらなる根井山の、七月十四日の燒火といふは、洛の大文字に似て、土地のほこりの一なるが、夫よりも、世に名の高かる、木曾の棧道とは、其數多き中にも、此處より上松までをば、世には云囃したるにて、夫も天文に、慶安に、近くも度々の改修ありては、危げもなき御世のためしにも、ひかれつべきを、さすがに道の左右には、層巒は重疊、怪石は磊々として

かけはしや命をからむつたかつら

の句の、誰もげにとは、うなづかるべうもや。

上松　須原へ三里九丁

長野縣西筑摩郡駒ケ根村上松

寢覺村は、此村つゞきにて、蕎麥にて聞え、臨川寺にて知られたるが、其寺の裏山傳ひに、降りゆけば、寢覺の床とて大きなる岩あり。其前後には、上臈岩、屏風岩、烏帽子岩なんどの名だゝるが、河も狹に亂立したるを、奔流怒りて岩に吼ゆれば、岩はさりげなう、前水を吸ひつくして沙白きに、水はいつしか後淵に逃げて、更に飛雪を吐くなんど、絶景絶奇の境なるが、少しゆけば數十丈の斷崖ありて、ふと白龍の走り出るをば、此處にては小野の瀧とぞいふなる。

須原　野尻へ一里三十丁

長野縣西筑摩郡大桑村須原

今の名の大桑村といふは、古くより蠶業の、發達せしの故なりとかや。此地は元祿頃に、山津浪出でゝ、所の樣の、面かはりたりといふが、關小坂などの邊は、昔のまゝに大岩聳えたちて、石の徑の斜なるを白雲の

立迷ふが、古關の跡なりとかや。其左に丸山ありて、山頂は、今井兼平が、城址なりといふ。ゆきゆけば、
蹊の屈曲と、水の彎々にぞ、此わたりの行旅は次第に、畫に入るとも見えたり。

野尻　三留野へ二里半　長野縣西筑摩郡大桑村野尻

村内の字長野に、木曾殿の館のあとゝてあるが、只翠柏のみぞ故城をば護りたる。是より三留野までは、翠
壁丹崖に傍ふて、亂流奇石をわたりゆくものから、一奇一勝の三里の道程は、ひたすらに送迎に忙しうこ
そは。

三留野　妻籠へ一里半　長野縣西筑摩郡讀書村三留野

此處より水聲は次第に遠ざかりて、小暗き岨みちを行けば、左に蒼翠たる一峯の出るが、これや山姥の謠曲
中なる、揚籠（あげろ）の山なるを、今は奈岐蘇嶽といへるは、何時よりの誤りにや。和合といふ地にて、釀せる木曾
酒は、香味淡きに名ありしとぞ。木曾の檜笠は、朽倒れたる、檜材にて製する由を、此地四五月の頃としい
へは、山も水も、總べては花の咲うづめて、一路の春風に、行人笠の重きは、落花の村の旅路ならんか。

妻籠　馬籠へ二里　長野縣西筑摩郡吾妻村妻籠

驛の東の松山は木曾義昌の城址にて
夫木集
手向にもむすひてゆかん風越のすそのゝ尾花穗に出にけり

の、風越山も此あたりとぞ。慶長五年秀忠將軍が、關ケ原の合戰事はてしときいて、一期の不覺と、足ずり
爲ししも此地なりとかや。妻籠嶺の右にあたりて、遙山の蒼々たるが中より、一白曳くが樣なるは、心せは
しくも、引わかれゆく、木曾川の末にやあるらん。

馬籠　落合へ一里五丁　長野縣西筑摩郡神坂村馬籠

木曾路の南門にて、木曾の御坂とは、此處の馬籠嶺をいふなるが、山中なる、女瀧、男瀧のひゞきは、早く
より世には流れて、兼好法師が、此地に住みたりとは、まことにかあらん。十曲嶺は、濃信の境にありて、
此れをこゆれば、行路漸う、險棧に遠ざかるものから、峽雲は、客愁と、いつしかはれゆくもうれしかる
らん。

落合　中津川へ一里五丁　岐阜縣惠那郡落合村

湯船澤より、流るゝ水の、釜澤川と、相合ふの地にて、仲三權守兼遠の季の子、落合五郎兼行が、居住の地
なりしとぞ。苗木といふは、道の北にて、遠山侯の、一萬六千石の城邑なるが、ねざめの里も、其の近くな
りとぞ。霧原山は、北東二里斗にありて、落合霧原をすぐるの、御坂越は、昔の鎌倉街道なりしといふ。美
濃路に入りては、境移り、俗の異なるものから、山の秀色と、水の媚態も、詩情酒興の、さては縱横ともい
ふべきにや。

中津川　大井へ二里半　岐阜縣惠那郡中津町中津川

驛は、惠那嶽の麓にて、山は、信濃の、西筑摩、下伊那の二郡に、跨りたる、當國一の、高山なるが、其形の、舟を伏せたる樣なればとて、覆舟山とも、稱ふるとかや。其を胞衣山といふ由は、天照大御神の胞衣をば、此處に藏めたりとの、傳說あるよりにて、山上には、惠那神社をいはひまつりて、山開きの、六月初めには、白躑躅の花の、峯々谷々に、咲きほこれるが、山深ければ、融けぬ雪とも見えたるを、能因法師が

白雲の上より見ゆる足引の山の高根や御坂なるらん

は此わたりをば、詠めるなりとぞ。

大井　大久手へ三里半

岐阜縣惠那郡大井町

古くより聞えたる地にて、長國寺には、根津甚平の、遺物許多ありといふが、甚平は正治頃に、放鷹の巧手と、世には知られたるの人なり。驛を離れて、大井の急流を過れば、亂山に路は高下して、やがて花無山の麓路には、西行が庵のあとゝてあり。西行塚といふも、程近くにあるを、蕭々の雨のみは、空しく古墳の苔を洗ひつゝ、只春草の生ずるにのみぞ、まかせたる。

大久手　細久手へ一里三十丁

岐阜縣土岐郡餘戸村大湫

此處より細久手までの間は、殘山剩土の、濕雲冥濛の地なるを、琵琶嶺に登りてぞ、伊吹、白山の山々も、日出でては曉碧を漾はし、日入りては殘紅を抹するの、さすがに見すてがたきの、風光なりとぞ。

細久手　御嶽へ三里

岐阜縣土岐郡日吉村細久手

此驛は、寛永十二年に開かれしにて、今の日吉村といへるは、和名抄に、日吉鄕とあるにちなめるにや。日吉に竝びて、月吉の里といふがあり。

夜ひるのさかひはこゝに有明の月吉日吉里をならへて

は、西行が歌と傳へたるが、此處より三日月がたしたる白き石の、出るをば、盆石なんどには、こよなき物に、世に賞美あさからずとぞ。

御嶽　伏見へ一里五丁

岐阜縣可兒郡御嵩町

山道一の精舍なりといふ、大寺山願興寺は、此驛にありて、傳教大師の開基なりとぞ。驛の南に、久々利村といふは、景行紀に、四年美濃の泳宮に、行幸すとある地にて、今の御殿畑といふは、行宮の址とかや。其傍に水草茂れるが、弟媛の、鯉を見給ひしあとなりとて、今も鯉をば產するとぞ。八坂入彥皇子の御墓は、大萱といふ山の峽にありて、其西の山上には、命と、八坂入媛、弟媛の、三柱の御靈の、鎭まりゐませるが、事去りて跡遠きを、千年の古陵は、獨白雲の掩ふのみなり。

伏見　太田へ二里

岐阜縣可兒郡伏見村

此處よりは、街路に、並木の松も見えそめて、春の日足には、杖履もやがてのどかなるを、驛の東の太田川は、木曾の下流にて、石出ては、水急なるが、齋藤拙堂の「晩に伏見驛に宿す、舟を賃して岐蘇川を下る」の記は、此處にての事なるを、斯る江山ありてこそ、千古の名文をも得たりけるにや。

太田　鵜沼へ二里

岐阜縣加茂郡太田町

東鑑に、驛家郷とある所にて、式内の、縣主神社といふも、此地の加茂の明神ならんか。此驛は、木曾川と、飛彈川の落合ふより、貨物の集散のおほかる中にも、北に一里の蜂屋といふは、柿の名所にて、美濃紙も、郡中にての、製出なるが、關鍛冶の名殘も、此處よりは遠からずとこそ。驛を離れて、坂倉、勝山などをすぎて、觀音坂を登れば、窟の觀音堂とて、當國一の勝境なるを、大田南畝が、道の記には其風光の、のこるなしとぞ。

鵜沼　加納へ四里八丁

岐阜縣稻葉郡鵜沼村

古くは、宇留間の里といひて、歌物語に名高きが、中古には、當年の詩宗たる萬里居士が、應仁の亂を避けし、閑居のあとも　此處なりとぞ。所のさまは、犬山、小牧も南に近くて、樂田は、小牧と犬山の間にあるが、山河は語らねども、興亡の跡は、歴々と數へられて、西はととへば、東西三里南北一里がほどは、各務（かがみ）野の名殘にて、當年荒涼の原野も、今は翠影紅香の、野外の春色は、蕩漾たりとぞ。帷子山といふも近くにて

夫木集

小よふけてかたひら山の時鳥ひとりねさめの友となるらん

加納　河渡へ一里半

岐阜縣稻葉郡加納町

岐阜の南に立並びたる、今も昔もにぎはしき驛路にて、維新前は、永井侯の、三萬二千石の城地なりしといふ。此地の特産なる傘は、岐阜提灯と、竝び賞でらるゝを、青傘に微風起りては、雨斜なる初夏の宵に、新涼は、紅紗に透きて、燈火の、まばたく情味こそ、他所には知られぬ、風流ならんか。

河渡　美江寺へ一里六丁

岐阜縣本巣郡合渡村

長良川は、岐阜の北西にて、二分したるが、南流しての、相あふ所を合渡とはいふらんを、鵜飼舟は、云はでもありなん。稻葉山と、岩田の小野は、名所として古戰場として、誰も語りつたへたるを、世に知られぬは、此わたりの蓮華草のながめにて、殘春を取繕へる、紅紫さま々々の粧ひは、又人界の物とも見えぬよ。いつぬき川といふは、今は水あせたりとか。

金葉集

君かよは幾萬代かかさぬへきいつぬき川の鶴の毛衣

美江寺　赤坂へ二里八丁

岐阜縣本巣郡船木村美江寺

美江寺の觀音は、養老中に、勅願寺として、伊賀より移したりしが、永祿の兵火に亡びぬるを、後に岐阜に移して、再興したりしとぞ。されば、地名にのみぞ、寺の名は殘りたるとぞ。名高き眞桑村は此地の北にて、西國札所の打納めなる、谷汲の觀音も程近しといふなり。富士紀行に

夕されは霧たと〳〵し河の名の杌瀨もとめて船やつなかん

の、杌瀨川も、此處にありて、其川下なる、結村といふは、十六夜日記に

守れたゝちきり結ふの神ならはとけぬ恨にわれ迷はさて

とあるが、其處なる結の神をよめるなりとぞ。

赤坂　垂井へ一里十二丁

岐阜縣不破郡赤坂町

平治物語に、子安森とあるは、此處の兒安神社の邊ならんか。御勝山は、西南にある小高き岡にて、其南のすその、御殿趾といふが、關ケ原の役の、東軍の本營なるを、勝軍山下の、夕陽低きには、人の、今も當年

をや語らふならんか。青墓の村の北に、古墳の累々たるは、驛の長者の奥津岐所と傳へられて、熊坂の故事も此處なりとぞ。月は青墓を照して寂々たるに、物見の松の、雨霏々たる所は、庚子の役に、福島正則が陣所のあとなりとぞ。

垂井　關ケ原へ一里

岐阜縣不破郡垂井町

今の停車場の傍に、御所野といふは、聖武天皇の行宮のあとにして、老櫻に春更けては、そこはかと花ちりかゝる五輪の塔は、持氏の子の、春王安王が、ながき恨のあとなりとぞ。夫より十町を隔てたる、宮代村といふは、後光嚴天皇の行宮の地にて、北の南宮神社は、金山彦命を祭れる、當國の一ノ宮なるが、其奥の院は南宮山の山腹にて、山は美濃の御山と稱へて、枕草子以下に見えたるの名所なり。垂井の清水は、玉泉寺の門前にあるが

假ねする宿の軒端はあれはてゝ露も垂井のあけ方の空

は、蒲生氏鄉が、此處にての詠なりしとぞ。

關ケ原　今須へ一里

岐阜縣不破郡關ケ原村

天武紀に、行宮を野上に起してとある、野上の里は、此驛の入口にて、謠曲の、班女が舊蹟といふも、此地の鷄籠山、觀音堂の附近なりとぞ。關ケ原陣に、東軍は、黎明に桃配野に到るといふも、又此處にして、古戰場のあとは、今の停車場のほとりの、東西一里、南北十四五町の地をば、いへるにて、松尾山は、往還の南にありとぞ。不破の關址は、八丁餘を隔てゝ、關の藤川は、今は藤子川と唱へ、鶯瀧は山中といふ地にありて、常盤の墓、大谷吉隆の墓も、其處にありといふが、主なきの春山には、只霞のみこそ立かくしたれ。

今須　柏原へ一里半

岐阜縣不破郡今須村

萬葉集に、「眞木立不破山越えて」と、人麿が詠みしは、今の伊增嶺にて、坂を下りて、長久寺村といふは、萬葉集に、和射見の原といひし所とぞ。美濃と近江は、此村を境なればとて、世には寢物語の里と、云ひならはしたるを、家と家とは立並びて、農家の燈火は、やがて江人の窓をば照すも、隔てなき世のためしならんかし。

柏原　醒ケ井へ一里半

滋賀縣坂田郡柏原村

「かくとたにえやは伊吹の」とよみけん、伊吹の山麓にて、其さしもぐさぞ、當驛の名產なるが、此處より正面に見ゆる、小谷山は、淺井三代の榮華のあとにして、南の片山蔭に、法華塔と稱へて、殘碑の朽ちかかれるは、元弘二年佐々木判官道譽が、源中納言具行朝臣の御輿を、街道の山際にかきすゑてと、太平記に述べたる所なれば、寃血の今も野花の紅と化りて、陰燐の、時に荒丘に燃ゆるを見るとぞ。

醒ケ井　番場へ三十丁

滋賀縣坂田郡醒井村

古事記の、日本武尊の條に、居寢清水とあるは、此處をば云ひたるにて、今錢屋とかいふ、旅店の前より湧き出るが、其流の末なりとぞ。

むすふ手ににごる心をすゝきなは浮世のゆめや醒ケ井の水

十六夜日記にもこうある所なり。

番場　鳥居本へ一里六丁

滋賀縣坂田郡息郷村番場

驛中の、八葉山蓮華寺の前なゐ、六波羅山といふは、鎌倉方の、越後守仲時以下が、京都の合戰に打負けて、此處までは落のびたるも、今は此うよと、一族四百三十二人が、腹切つたるの處とて、山下一叢の髑髏には、主を誰とも知らねども、糟谷十郎が、執筆の過去帳には、今も當時に、消えぬ怨みののこりたるとぞ。此は之元弘三年五月の九日なりといふ。磨針嶺をのぼれば、望湖亭といふは、興ある所にて、近くの清渚と白沙に、遠くの山光と水色は、只樓上の客の、管するにのみぞ、まかせたるは。

鳥居本　高宮へ一里半

滋賀縣坂田郡鳥居本村鳥居本

多賀明神の、鳥居あるよりの名にて、神教丸の藥舗は、今も赤玉とて、誰も知りぬらんか。澤山の城址は、此處より西の、松の木の間にて、彦根は其西に、湖に沿ひたるが、千々の松原は、城北の松原村ぞ、其あとなるらん。村をすぎて、湖へ突き出たるは、磯崎の社にて、磯邊つたひに、筑摩の社も一里に近しといふ。其北にとなるが、旦妻（あさづま）の里なるを、「あだしあだ波よせては、かへる波の、あさつま舟」の、如何なる夢をば、載せてゆくらんと思ふも、「淺ましや」、小野の細道をわけゆけば、不知哉（いさや）川といふなり、

新古今

あたにちる露のまくらにふしわひて鶉なくなりとこの山風

其鳥籠（とこ）の山は、此川上なりといふ。

高宮　愛知川へ二里八丁

滋賀縣犬上郡高宮町

蚊帳の産地に、聞えたるところにて、多賀大明神は、此處より南一里にて、「伊邪那岐大神者、坐淡海之多賀也」と、古事記にある所なり。籐細工に名高き、つゝらをり村につゞきて、豐郷村の、四十九院唯念寺は、聖武天皇の御祈願所なりしとて、文和には、光嚴天皇の、行在所にも宛られたる由緒の寺なりとぞ。

愛知川　武佐へ二里半

滋賀縣愛知郡愛知川町

俊頼朝臣の

ゐち川や岩こす浪の瀨をはやみくたすいかたのいちはやの世や

の、愛知川は、驛の西を流れて、渡れば、右に觀音寺山見ゆるが、山上の觀音正寺は、西國の札所に名高き所なり。寺の背は、佐々木家の累代の城址にて、其向ひなるが、箕作の城のあとなりとぞ。おいその森は、東老蘇と、西老蘇の間にて、時鳥の名所なるを、懶雲の林を掩ふて、痴雨そぼふるの夜半には、杜鵑聲裡に、家山を夢みるの遊子や、おほかるらん。安土の城址は、觀音寺山の北にて、高さは二町餘の、周圍一里半ほどなるが、礎石の猶存したるの邊に立てば、北は湖水の漫々たるに、比良、比叡の高根に、如意、長等の山々は、蜿蜒として、南は田園の隴々たるに、三上の青螺と、蒲生野の淺渚まで、山河草木は、今も一樣に織田右府が當年の偉業をば、語るとぞ見えたる。

武佐　守山へ三里半

滋賀縣蒲生郡武佐村

此處の、長光寺の城址といふは、當年權六勝家が、雲霞とかこめる六角勢に、大事の水の手を斷たれたるにぞ、さらばかうよと、用意の水甕を、槍の石突に打碎きて、眞一文字に、きつて出たる、武勇の譽れを、甕

破り柴田と、語り傳へしあとなりとぞ。路次の鏡の宿は、牛若の故事に知られて、鏡山は、「いさ立よりて見てゆかん」の歌に、聞えたるが、宗盛の墓は、野路の篠原の山中にて、枯葦そよぐ首洗の池も其ほとりにありといふ。

新勅撰

はるかなる御上か嶽を目にかけていくせわたりぬやすの河なみ

の、やす川は、今やすざらしとて、布に名高きのところなり。

守山 草津へ一里半　滋賀縣野州郡守山町

「時雨もいたくもるやまの」と、貫之がよみたりし所にて、驛内の兜屋敷といふは、花若が、父の仇秋長を討ちたるの故蹟とて、事は望月の謠曲にぞ傳へたる、守山寺の觀音堂は、田村將軍の草創といふが、門前の青柳の水は、鎌倉右府が、建久の上洛に、單騎馬に水かひし、平治の當年を忍び出てゝ、一代の風流をば、盡しゝのあとなりとか。

草津 大津へ三里二十四丁　滋賀縣栗太郡草津町

海道を語るの遊子は、鈴鹿の山路をこゑ、山道を說くの行客は、琵琶の濱邊づたひに、一路の薫風は、かくて草津の驛に入るといふなり。

東京名所の今昔（第三室）

（會場の都合により、四谷、牛込、小石川、麻布の震災外の地は略する事とせり）

一、江戸切繪圖　高柴三雄等編　嘉永中　近吾堂板　二〇枚

二、東京市全圖　東京郵便局製　明治四十年　大倉書店發行　一一枚

三、麹町區之部（左記の陳列版畫中、廣重、豐國、英泉、國芳等は江戸末年を示し清親、探景等は明治以後の東京を描けるものなり。以下之に同じ）

御城内釣橋之圖　清親　一枚

二重御橋　廣重　一枚

二重橋之圖　清親　一枚

糀町外櫻田辨慶堀　廣重　一枚

外櫻田辨慶堀櫻の井　廣重　一枚

山下町日比谷外さくら田　廣重　一枚

櫻田辨慶堀原　清親　一枚
かすみかせき　廣重　一枚
霞か關山王祭練込之圖　廣重　一枚
霞ケ關　豐國　一枚
糀町一丁目山王祭ねり込　廣重　一枚
山王御宮　豐國　一枚
九段坂五月夜　清親　一枚
いひ田まち　豐國　一枚
飯田町九段坂之圖　廣重　一枚
常盤橋内紙幣寮内之圖　清親　一枚

四、神田區之部

今川はし　豐國　一枚
神田明神　廣重　一枚

神田明神曙之景　廣重　一枚
神田神社曉　清親　一枚
神田のやしろ　豐國　一枚
神田明神境内　巴水　一枚
神田大明神御祭禮之圖　豐國　三枚
するがだひ　國芳　一枚
筋違内八ッ小路　廣重　一枚
神田萬世橋賑之圖　一景　三枚
神田紺屋町　廣重　一枚
神田川夕景　清親　一枚
昌平橋聖堂神田川　廣重　一枚
水道橋駿河臺　廣重　一枚

五、日本橋區之部

日本橋通一丁目　廣重　一枚
四　日　市　國芳　一枚
日本橋江戸ばし　廣重　一枚
日本橋雪晴　廣重　一枚
日本橋眞景幷魚市全圖　廣重　一枚
日本橋美人の夕景　國周　一枚
江戸ばしより日本橋之景　清親　一枚
日本橋夜　清親　一枚
江戸橋夕暮富士　清親　一枚
江戸はし　豐國　一枚
江戸橋之圖　國政　一枚
鎧のわたし　豐國　三枚
鎧の渡し小網町　廣重　三枚
藥げんぼり　豐國　一枚

する賀てふ　廣重　一枚
五節句之内睦月（駿賀町こふく店圖）　國芳　一枚
駿賀町雪　清親　一枚
菊月まつり（傳馬町圖）　豐國　三枚
大傳馬町こふく店　廣重　一枚
大傳馬町大丸　清親　一枚
大てんま町木綿店　廣重　一枚
馬喰町初音乃馬場　廣重　一枚
よし町・豐國　一枚
人形町・豐國　一枚
茅場町圖　國貞　一枚
かやば町　國芳　一枚
兩國夕涼みの圖　豐國　三枚
濱町より寫したる兩國大火　清親　一枚

三ッ又永代橋遠景　清親　一枚
元柳橋兩國遠景　清親　一枚
兩國大火淺草橋　清親　一枚
兩國燒跡　清親　一枚
久松町にて見たる出火　清親　一枚

六、京橋區之部

從京橋新橋迄煉瓦石造商家之圖　國輝　三枚
尾張町　豐國　一枚
新はし　豐國　一枚
京橋勸業場之景　探景　一枚
京橋松田の景　探景　一枚
京はし　豐國　一枚
京橋竹がし　廣重　一枚

大根がし　巴水　一枚
新富座新狂言　國政　三枚
新富町新富座景　探景　一枚
東本願寺　豐國　一枚
鐵炮洲築地門跡　廣重　一枚
築地御門跡之圖　國芳　一枚
築地保氏留館繁榮之圖　國輝　三枚
鐵炮洲稻荷橋湊神社　廣重　一枚
鐵炮洲佃眞景　廣重　一枚
鐵　炮　洲　豐國　一枚
佃しま住吉乃祭　廣重　一枚
永代橋佃しま　廣重　三枚
永代橋往來繁華佃海沖遠望之圖　國政　一枚
佃島雨晴　清親　一枚

七、芝區之部

虎の門夕景　清親　一枚
芝あたご　豐國　一枚
芝あたご山　廣重　一枚
芝愛宕山吉例正月三日毘沙門之使　廣重　三枚
愛　宕　山　豐國　一枚
愛宕下萩小路　廣重　一枚
愛宕山遠望品川海　北壽　一枚
芝　神　明　前　豐國　一枚
芝神明宮祭禮生姜市之景　英泉　一枚
芝神明社內之圖　廣重　一枚
芝神明增上寺　廣重　一枚
增上寺塔赤羽根　廣重　三枚
芝赤羽根增上寺　廣重　一枚
芝增上寺　巴水　一枚
赤羽根の風景　春升　一枚
赤羽根水天宮　豐國　一枚
白銀樹目谷　豐國　一枚
金杉橋芝浦　廣重　一枚
芝うらの風景　廣重　一枚
伊皿子潮見坂之圖　廣重　一枚
高輪の景　廣重　一枚
葉月高輪　豐國　三枚
高　輪　豐國　一枚
高輪うしまち　廣重　一枚
高輪牛町朧月景　清親　一枚

八、赤坂區之部

溜いけ　豐國　一枚
た目伊け　清親　一枚
葵坂の圖　廣重　一枚
葵　坂　豐國　一枚
虎の門外あふひ坂　廣重　一枚
紀の國坂赤坂溜池遠景　廣重　一枚
赤坂紀伊國坂　清親　一枚
赤坂桐畑　廣重　一枚
赤坂桐畑雨中夕けい　廣重　一枚
赤坂きり畑山王宇羅山　清親　一枚
赤さか氷川　豐國　一枚

九、本郷區之部

御茶之水之圖　廣重　一枚

御茶の水　豐國　一枚
茶の水雪　清親　一枚
湯島元聖堂之景　清親　一枚
舊聖堂より萬世橋を見る　廣重　三枚
御茶の水　巴水　一枚
本郷光景　豐國　一枚
湯しま天神坂上眺望　廣重　一枚
湯島天神　豐國　一枚
湯しま天神社　廣重　一枚
妻戀稲荷　豐國　一枚
千駄木團子坂花屋敷　廣重　一枚
谷中團子坂菊　清親　一枚
根津權現　豐國　一枚
根津神社秋色　清親　一枚

一〇、下谷區之部

下谷廣小路　廣重　一枚
上野東叡山并不忍之池全圖　廣重　一枚
不忍池新玉堤春之景　廣重　一枚
池の端辨天　清親　一枚
池の端花火　清親　六枚
三味せんぼり　豐國　一枚
簑輪金杉三河しま　廣重　一枚

一一、淺草區之部

淺草橋夕景　探景　一枚
淺草橋雨中之景　探景　一枚
柳ばし　豐國　一枚
藏前　國芳　一枚
駒形堂吾嬬橋　廣重　一枚
駒形　豐國　一枚
駒形河岸　巴水　一枚
淺草川首尾の松御厩河岸　廣重　一枚
首尾の松　豐國　一枚
淺草觀世音並公園地繁盛之圖　重清　一枚
金龍山仁王門　春山　一枚
淺草　國芳　一枚
淺草金龍山　國芳　三枚
淺草寺　豐國　一枚
金龍山之圖　廣重　一枚
淺草寺年乃市　清親　三枚
淺草夜見世　清親　一枚
極月淺草市　豐國　一枚

淺草寺雪中　清親　一枚
淺草觀音の雪晴　巴水　一枚
淺草田甫酉の町詣　廣重　三枚
淺草田甫太郎稻荷　清親　一枚
猿若町三芝居之圖　廣重　一枚
猿若町夜之景　廣重　一枚
待乳山山谷堀夜景　廣重　一枚
花　川　戸　豐國　一枚
墨田河橋場乃渡かわら竈　廣重　一枚
今　戸　豐國　一枚
眞崎より關谷の里を見る圖　廣重　一枚
衣更着眞崎　豐國　一枚
まつさき　國芳　一枚
淺草夕照　廣重　一枚

一二、本所區之部

兩國橋秋月　芳虎　一枚
兩國花火　廣重　一枚
兩國花火之圖　清親　一枚
兩國橋夕涼之光景　豐國　一枚
兩こく回向院元柳橋　廣重　一枚
本所御藏橋　清親　一枚
大川端石原橋　清親　一枚
大川端一之橋遠景　清親　一枚
堅　川　豐國　一枚
一　ッ　目　國芳　一枚
五百羅漢さゞゐ堂　廣重　一枚
五百羅かん　豐國　一枚
枕橋之圖　探景　一枚

小梅堤　廣重　一枚
小梅　豐國　一枚
小梅曳船夜圖　清親　一枚
小梅曳船通雪景　清親　一枚
柳しま　廣重　一枚

一三、深川區之部

大はしあたけの夕立　廣重　一枚
永代橋　豐國　一枚
永代橋　廣重　一枚
永代橋之景　英泉　一枚
ひくに橋雪中　廣重　一枚
深川萬年橋　廣重　一枚
深川八幡　豐國　一枚

深川八幡宮　廣重　一枚
深川八幡ノ社　廣重　一枚
深川八まん山ひらき　廣重　二枚
深川八幡宮　廣重　一枚
成田山旅宿　豐國　一枚
深川三十三間堂　廣重　一枚
深川木場　廣重　一枚
木場　豐國　一枚
深かは木場　清親　一枚
洲崎はつ日の出　廣重　一枚
洲崎　豐國　一枚
深川不ゆき辨天　清親　一枚
深川洲崎十萬坪　廣重　一枚

以上

山　岡　書　店
〒180 武蔵野市中町1—21—5
TEL　0422—51—9772

¥4000